
オメガさんの話

鈴韻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オメガさんの話

【Nコード】

N5319L

【作者名】

鈴韻

【あらすじ】

あなたは、ひとりじゃない。

寂しいとき、悲しいとき、そつと心のドアを開けてみてください。
オメガさんは、いつでもあなたの心の中にいます。

オメガさんの話（前書き）

はじめまして。鈴韻^{りいん}と申します。

今のところは頑張っておりますが後でgggdになるのは目に見えております。

それでも良いという方はどうぞ見てやってください。

ロジュニヴァースは俺の嫁。

藤田伸二は俺のジャステイス。

オメガさんの話

オメガさんは、北海道に位置するとある高校の数学の授業中に生まれた。

彼の口癖は、「寂しいよう」だった。これは、そんなキュートでラブミーでマツチョコなオメガさんのちいさな物語である。

「おい、シート」オメガさんは、私のことをシートと呼ぶ。

「何？オメガさん」私はいちいち「さん」等と付けるのが面倒臭いので本当のことを言うと「オメガ」と呼び捨てにしたいのだが、彼の名前は「オメガさん」であり敬称を付けると「オメガさんさん」「オメガさん様」となってしまうので毎回仕方なく「オメガさん」と呼んでいる。ちなみに、彼を生み出した世界の人間達も敬称を付せずに「オメガさん」と彼を呼び捨てにしているらしい。

「シート、寂しいよう」

「知るか」しばらく前までは、寂しいようと言われてはいちいち反応してみたり同情してみたり、相手になってやっていたのだが、次第に飽きてきたので適当にあしらうことにした。というか、目の前に私というシートがいるのにそれでもなお寂しいなど言うのは私に対して失礼ではないかということに気付いたのだ。しかも彼はすぐに凶に乗る。あまり相手にしていい気にさせてはいけないのだ。

「シート、遊ぼうよ」

「何して遊ぶの？」彼はごっこ遊びが大好きだ。今日もオメガさんは案の定ごっこ遊びをしたいと提案してきた。しかし、主に私たちはごっこ遊びと言うよりもどんなごっこ遊びをするかという話し合いの方をむしろ楽しんでいる。いや、楽しんでいるのは私だけでオメガさんは真剣に提案をしているのかも知れないが。

「サンシヨウウオの共食いごっこしようよ。僕が捕食されるサンシ

ヨウウオで、シータが捕食するサンシヨウウオ」

「いいのかそれで！？お前はDMか！？てかなんでサンシヨウウオ？！」

「シータ知らないの？最近生まれたサンシヨウウオの幼生達は共食いブームで絶賛共食いで共食いせざる者はサンシヨウウオにあらずなんだよ？！」でも、とオメガさんは考える。

「そういえば僕たちサンシヨウウオじゃないんだった。そうだ、じゃあ、ばんえい競馬ごっこしようよ。僕が馬で、シータが騎手」

「なんなんだよお前！またしてもDMじゃねーか！そんなに叩かれるのか！？てかなんでここではばんえい競馬？！」

「なんか嫌そうだね。じゃあ、鬼ごっこしよう。僕が鬼で、シータがネズミ」

「いいよ」私たちは鬼ごっこをすることになった。

さて、ここで今私たちのいる場所について記しておこう。

あなたの心の中である。

そう、私たちはあなたの心の中で鬼ごっこをしたのだ。もちろん信じるか信じないかはあなた次第。

しかしあなたが信じようが信じまいが、オメガさんとシータの鬼ごっこは実際にあなたの心の中で起こっている現実である。そして鬼ごっこは、オメガさんが私を見つけられず「寂しいよう」を連発し始めた時点で終了となった。

コスプレ、あるいは磁石

オメガさんの趣味は、コスプレである。

私たちの住処であるあなたの心の中にはとても沢山の衣装が用意されている。いや、優しくて寛大なあなたの心の中には何でも存在するのだ。ウォーターベッドだってあるし、鉄棒だってある。二千元札だってあるし、インターネットが利用出来るパソコンだってシタールだってある。

つまり、あなたの心は私たちのオアシスであり、ユートピアなのだ。

オメガさんは、素敵な八頭身だ。腰から上と下の長さの比率はもちろん黄金比。すらりと伸びた足や鍛え抜かれた腹筋はまるでギリシヤ彫刻のようだ。私はそこまでオメガさんが好きなわけでもないしむしろうつとうしくも思っているが、彼がどんな衣装を着ても似合うということについては保証しようと思う。

最近のオメガさんのマイブームは、上半身裸のセーラー服である。上半身裸ならそれはもうセーラー服でも何でもなくただのプリーツスカートとハイソックス（もしくはニーソ）だという人もいるかもしれない。

しかし彼は自分が身につけている衣装をセーラー服であると言い張っている。私も彼と同意見である。

よって彼の至福の時間というのは、上半身裸のセーラー服を着てごっこ遊びをするときだ。最近「女子高生ごっこ」「未亡人ごっこ」などが彼のお気に入りらしい。

ちなみに余談であるが、私たちを生み出した世界のインターネット上に存在する「うそこメーカー制作 ごっこメーカー」で「オメガさん」と入力すると、『オメガさんの得意ごっこ 山賊ごっこ』

と表示される他、そこから「神話メーカー」に飛ぶと『夏の神 オメガさんツソス アキタリスにて、馬の神パツパカスと貴婦人の女神ザマースの間に生まれる。幼少期は聖なる鼻水を垂らしながら常に誰かに見張られるような気分のまま過ごす。ガラスの神シエラソスと恋に落ち、八つ当たりの神オルバフォーヌを授かる。人間界に雷を落としすぎの罪を償い、ハレンチな一生を終え、星になる。』と表示される。

オメガさんは、しばしば自分のコスプレ趣味に私を巻き込む。

「シータ、ミクね。僕ルカ」なんだか水色の鬘と蝶の飾りがついたヘッドホンを付けさせられ、ドレスを着せられたところまではまだ良かったのだが、そのあとピンク色の鬘を着けたオメガさんに指を絡め合わせられたときには背筋が凍った。

「シータ、ムスカ大佐ね。僕シータやる」

「いいよ。これってもしかしてラピユタごっこ入ってる?」

「うん。そうだね。あ、僕シータやるからシータは大佐とパズーとハウルとシータのおばちゃんとドーラの役ね」

「は?!何その無茶振り!シータって名前かぶっててわかりにくいし!しかもなんかラピユタじゃないの入ってるじゃん!なんだよ!ハウルってどこで出てくるんだよ!」

「あなたはここから出ることも出来ずに、ここで死ぬの!!」

「よし、行こう竜の巣へ!」

「パズー、お願いがあるの。ラピユタのこと忘れて。」

「四〇秒で支度しな!」

今日もあなたの心の中では、平和なごっこ遊びが行われている。

「「バルス!!」」

コスプレ、あるいは磁石（後書き）

まだまだ話は続きますが、いつ更新するかはわかりません。
ごめんなさい・・・

孤独（前書き）

オンライン・ロントリー・オメガさん。

孤独

オメガさんは、自称孤独である。

「シータ、僕寂しいよう」

「黙れ寝ろ」

「シータは僕を見捨てるんだね・・・寂しいよう」

「気持ち悪っ！てかお前どの面下げて一人称に『僕』とか使っちゃつてるんだよ！？それ以前に私の前でそんなに寂しい寂しい言ってお前は失礼だと思わないのか？！」

「シータに怒られた・・・寂しいよう」

オメガさんには何を言ってもだいたい無駄である。

あなたの心の中には、オメガさんと私以外にもたくさんの同胞がいる。しかし、オメガさんは人見知りが激しいので誰にも馴染めず、いつも隅で筋トレをしている。

筋トレは彼の趣味だ。彼のコスプレのレパトリーで上半身裸のものが多いいのは、鍛え抜いた腹筋をアピールして女の子にモテるためである。

しかし、実際はその強靱な肉体と見方によつては常軌を逸した性的嗜好を持っているようにもとれる服装のために誰も彼には近づかない。いや、恐ろしくて近づけない。私も他の同胞たちと同時期に生まれていたならば、絶対にオメガさんには近づかなかった。ただ、昔のオメガさんはこんな風ではなかったたのである。

オメガさんは昔、あなたの心の中に閉じこもる前に少しかだけ人間界に出てきていた。そのころの彼は恐れを知らず、無邪気で、人見知りもしなかった。そう、活発で誰とでも仲良くなりたがるごく普通

の男の子だったのである。

当時の彼のマイブームはままごとで必ず夫婦の妻役になって「あなたお帰りなさい、疲れたでしょう。ええと、ご飯にします？ライスにします？・・・それとも、お・こ・め？」ともじもじしながら言うことだった。そしてそんな彼に、私はいちいち反応して「飯食うしか選択肢ねーじゃん！」「パン食わせろよ！」「風呂入れないのかよ！」「うーん、じゃあおこめで・・・って、全部米じゃん！」と突っ込んでいたのだが、今になって考えるともうあれは若気の至りといふかなんというか本当に思い出たくない記憶の一つである。

そして私たちがよく遊んでいたのは交番が近くにある公園の砂場である。つまり、コスプレもなにもしていなかったオメガさんが公然猥褻の罪に問われるのは時間の問題であり実際はおまわりさんが優しくかったために逮捕はされずに済んだのだが、ピュアでナイーブなオメガさんはおまわりさんの「あんたそんな格好してたら女の子が寄りつかないよ」という言葉に大いに傷ついたようである。

その後のオメガさんは私の薦めでゾウ柄の桃色ブリーフをはいていたのだが、それでも道路ですれちがった若い女性に叫ばれたり再びお巡りさん（おめぐりさんと読まないように注意するべし）に注意されたりと挫折を連続して味わい、その結果あのようにあなたの心の中に閉じこもっていじけるようになってしまったのである。

一時期、彼は気を取り直して人間界に戻ってきたこともあった。現状を見ればわかるように結局は挫折に終わったのだが。その時の話はまたの機会に話すとしよう。

ちなみに、私がオメガさんと一緒にあなたの心に閉じこもって外に出ない理由は、だいたいオメガさんのそれと同じである。

マソヒスト（前書き）

30分で書き上げました。

マソヒスト

オメガさんは、ドMである。

今までの記述でわかる方もいるかもしれないが、ドMである。

筋金入りの、ドMである。

大事なことなので、三回言った。

つまり、彼の鍛え抜かれた筋肉は虐められても体が悲鳴を上げないようにするための工夫であり、これだけ鍛えていれば誰も自分を殴ったり蹴ったりして罪悪感を感じないだろうというオメガさんなりの配慮でもある。そう、オメガさんは自称気配り上手ないいオトコなのである。

「ねえ、シータあ」しばしば彼はこうして媚びるような声を出して私にすり寄ってくる。無論罵倒されることが目的である。

「なんだよその語尾やめろよ！気持ち悪っ！」

「シータに嫌われた・・・さびちいよう」

「お前マジで気持ち悪いぞ！てかさびちいようってなんだよ！しかも寂しいとか言っておいてニヤニヤするな！」

「うふふ」彼は恍惚の表情を浮かべている。私は自分が嫌になる。

「・・・」

「えっ・・・僕を無視するの？寂し・・・あつ、こういうプレイなんだね！そう！もっと僕を無視して！そう！シカトプレイ！鹿と一緒に歯科でシカト！なんちゃって！うふふふ！！」

「頼むから私に近づかないでくれ・・・」私は彼を殴りつけたい衝動に駆られるが、そんなことはしない。なぜなら、私が彼を殴ろうものなら彼は抵抗するどころか喘ぎ声を上げて悦ぶに決まっているからだ。そして、「うああっ！いいよ！いいよシータ！もっと僕を殴って！そう！もっと蹴ってっ！！っああ痛い！」なんて言い出す

ことは確定的に明らかなのだ。

ふと、声が聞こえる。

「ねえ、あの人たち何やってるの？」

「てかあれってむしろ人なの？」

「こらっ！子どもは見ちゃいけません！」私も周りの同胞達とはあまり親交がないのでよくわからないが、最後の言葉はおそらくシグマさんだろう。とすると、先の二人はアルファとベータか・・・

「あの人達変なのー！！」・・・えっ？

私は振り向いた。3人は私が振り向いたのに気付くときやあと小さく叫んで走っていった。

「お前ら！今『あの人達』って言ったな？！おい！私まで変態扱いしただろ！」すると今度は後ろから笑い声がする。

「うひひうひひ。シータの変態っ！あははっ、これで僕たち同類だね！」

「やめろ！それ以前にお前自分で変態自覚してたのか！」

「シータへんたいーい！！やーい変態！」

「死ねばいいのに・・・」

ああ、神よ。私は変態に成り下がってしまったのだろうか。ついにオメガさんと同類になってしまったのだろうか。お願いだからそんなことはないと言ってくれ。何かの手違いだと言ってくれ。このままでは私は一生立ち直ることが出来ないだろう。

ああもう死にたい・・・

A r t i s t

オメガさんは、ゲイジュツが好きである。

「シータ、遊ぼうよ。・・・えっ、無視・・・いや、シータ！今日はごっこ遊びじゃないから！カラオケ行こうよ！」あなたの心の中にはもちろんカラオケボックスだって存在する。ネカフェもある。冥土メイド喫茶もある。ファミマもTSUTAYAも存在する。ちなみにファミマはあなたの心の外の世界にはあまりないので結構貴重である。

「・・・」

「ほら、カラオケ！最新式なら個室でもダンスフロア付きって言うのがあるらしいよ！シータ、歌わなくても踊れるんだよ！」

「・・・うっ」心惹かれた。

私たちはカラオケに行った。

「ばーかばーかっ！ばーかばーかっ！」無論歌っているのはオメガさんである。私はひたすらに踊る。オメガさんも踊る。まさにゲイジュツである。

お察しの方もいるだろうが、私たちの肉体はギリシャ彫刻の美しさに魅せられ影響を受けたものである。私たちは美しい物が好きなのである。

しかし、と言う方もいるだろう。何も美しい物ばかりが芸術ではないだろう、と。もちろん私たちはそのこともきちんと把握しているつもりである。だから、私たちはジャンルを問わずに全ての芸術と呼ばれる物を愛し、実践し、語る。

しかし、やはり歌い踊っている最中に店員がアイスココアを持って入ってくるというのは多少なりとも恥ずかしいものがある。

「お客様、お飲み物のおかわりをお持ち・・・」

「あ・・・そ、そこに置いてください」

「か、かすい、かしこまりました」そんなときも、オメガさんは変わらず歌って踊り続ける。

「じゃぱにーず・にんじゃ・なんばーわんっ！」現実から逃避するかのように歌い踊る。喉が哽れるまで。

カラオケから戻ってきてから、私は暇だったのでオメガさんと一緒に絵を描いた。

ゲイジユツである。

私の絵のタイトルは「消しゴム」。オメガさんの絵のタイトルは「名刺」。

私は、あまり絵が得意ではない。しかしオメガさんは絵を描くために生まれてきたような天性の持ち主である。私はそんな知り合いを持ったことを誇りに思う。

「オメガさん、名刺の書き方教えてよ」オメガさんは度々私に絵の描き方を教えてくれる。

「え？あ、いいよ。まず、四角を描いて・・・うん、そうそう。それでね、四角の中に名前を書くんだ。えっと、漢字書けるかな・・・書けなかったら英語でもいいや。うん。Light Yagami. あれ、シータアルファベット上手いね！」オメガさんは褒め上手である。

「あと、住所と電話番号ね。あー・・・でも、スペースちっちゃくして書けないか。適当に線でも引つ張っておけばいいや。うん・・・おおっ！完成！」オメガさんは手を叩く。いつもこんな繰り返しである。

結論として、オメガさんは、素晴らしき芸術家なのである。

A r t i s t (後書き)

だんだんクオリティ下がってきました。
ほんとにごめんなさい。
まだ書くつもりはある。
ネタはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5319/>

オメガさんの話

2011年10月6日23時34分発行